76

向井元升『庖厨備用倭名本草』の底本・李東垣『食物本草』について

岩間眞知子
茶の湯文化学会

江戸前期・寛文11年（1671）の序を持つ向井元升『庖厨備用倭名本草』は，和文で記した日本の食物本草の先駆けである．自序に「東垣先生食物本草を取り略々これを訳し」とあり，元の李杲（東垣）『食物本草』を基としたと述べる．この底本について，難波恒雄氏は『漢方文献叢書』第6輯で，上野益三氏は『食物本草本大成』第7巻で共に「元升は李東垣『食物本草』を基とした」と解説し，それ以上の考察はない．では李東垣『食物本草』とは，具体的にどの書であったのだろう．

元升が『庖厨備用倭名本草』をまとめる20年前，慶安4年（1651）に京都の山屋治右衛門は和刻本『食物本草』全10巻を刊行した．その底本は，元の李杲（東垣）撰と称する明の万暦48年（1620）銭允治刊本である．この底本の成立は複雑で，岩井大慧氏によれば，李杲に『食物本草』と題する著作はなく『用薬法象』と称するものがあり，それを明・盧和が抜書きしながら未刊だったものを，明の汪頴が『食物本草』として自分の名前で刊行，その汪頴本を7巻とし，そこに呉瑞の『日用本草』3巻を加えて，銭允治が校訂し，李杲（東垣）『食物本草』全10巻と称して刊行したものという（『食物本草』について）．同書の和刻本を，上野益三『食物本草本大成』第4巻も，中村璋八・佐藤達全『中国古典新書続編5・食物本草』も収録する．そこで江戸時代に広まったものは，10巻本の李東垣『食物本草』であり，当然，元升が『庖厨備用倭名本草』の底本としたものもそれと思われた．ところが，『庖厨備用倭名本草』巻13にある中郎先生『茶譜』を，10巻本李東垣『食物本草』は収録しない．そのため中郎先生『茶譜』の典拠は不明であった．

実は中郎（袁宏道）先生『茶譜』も，本当の著者と書名は明の張源『茶録』（喩政『茶書』乙本［1613年］所収）である．その張源『茶録』が中郎先生『茶譜』の名で，明・姚可成匯輯『食物本草』巻16に収録されていると方健氏はいう（『中国茶書全集校證・2』中州古籍出版社　2014年）．そこで明・姚可成輯『食物本草』を探すと，達美君・楼紹来の点校本（1994年人民衛生出版社）があった．しかし明・姚可成と称する明刊本はなく，元・李杲編輯，明・李時珍参訂，扉頁題『備考食物本草綱目』とある22巻本『食物本草』を，達美君らが実際の編者を姚可成と推定したものであった．22巻本『食物本草』には，崇禎11（1638）年刊行と崇禎16（1643）年の増補版があり，点校本は後者を底本とする．達美君らの解説によれば，崇禎16年版は崇禎11年版に李時珍序や総目を加えたものという．

さて日本に現存する『食物本草』を漢籍データベースで検索すると，10巻本は和刻本のみで，明刊の22巻本が7点と最多であった．そのうちの国会図書館蔵明刊22巻本は，刊行年を崇禎11年としているが，崇禎15年（1642）の姚可成の「引」や李時珍序や総目も収録するため，実際は崇禎16年版であろう．

22巻本の特徴は，冒頭に「救荒野譜」として草木120種を図と共に掲載し，冒頭の「引」と巻21の火，金，玉石，土に姚可成の文があり，土・観音粉の項目で姚可成は，飢饉がいかに酷いものか，飢えに土を食料とする方法を詳述する点である．姚可成は蒿萊野人と自ら号するほか伝は未詳のため，編者を姚可成とすることにはなお躊躇する．ただ同書が飢饉に苦しむ民を救いたいとの思いで救荒食物の知識を前に置き，それを普及しようとする制作意図は看取できる．

『庖厨備用倭名本草』において，元升は底本をそのまま写さずに咀嚼し，和文で自分の言葉で記述する．そのため底本を特定しにくいが，中郎先生『茶譜』の部分は漢文のままで，張源『茶録』にない前文があるなど，22巻本『食物本草』巻16所収のものと文も構成も一致する．そのため元升のいう李東垣『食物本草』は崇禎16年版22巻本の可能性が高いと考える．なお22巻本『食物本草』について，今後も研究を進めたい．